

一人一人の生徒を守る、学校の危機管理と学習保障

～令和元年台風19号による被災時の対応から～

長野県長野市立豊野中学校
校長 林 理恵

1. 研究テーマ

令和元年10月13日(日)早朝、台風19号による千曲川決壊から、本校は南校舎、北校舎、体育館の1階部分のすべてが約1.5m床上浸水をした。それにより学校生活の基盤となる水道、電気等のライフラインが使用不可能となり、登校日数13日間の臨時休業を続けるを得なかった。また、全校生徒251名中40名の家庭が被災し、避難生活を余儀なくされることとなった。

ここでは、被災当初から学校再開まで、一人一人の生徒の安全を保障し以前のように安心して過ごすことができる学校生活を取り戻すために、本校が対応した取組を振り返りながら、学校の危機管理と学習保障について、考察してみたい。



被災した職員室

2. ねらい

地球温暖化が問題とされるようになってから久しく、全国各地では、その影響を受けた災害が年々続いている。その一方で、本校も過去に被災し、地域全体も水害の歴史があることを知っていながら、自分自身がその影響下でここまでの状況で被災するとは正直なところ思っていなかった。台風被害についても、どちらかというとな楽観的であったと反省する。根拠もなく「長野県は大丈夫…」とどこか油断していた自分がいたように思う。

日々の学校生活においては、生徒に寄り添いながら、その変化に気づき保護者と連携して生徒の学校生活を支えてきたつもりでいた。しかし、いざ災害の場面でどれだけ生徒の学校生活を守ることができたか。また、一人一人の生徒、保護者の思いに寄り添っていたのか。そんな自分への反省と来年度以降も起こるかもしれない被災を想定し、本校の取組が少しでも今後の参考になればと、被災から復旧・復興を目指した3か月の歩みをまとめることとした。被災校としての経験を、未

来へとつなげていきたいと願うものである。

3. 経過・内容

(1) 生徒の安全保障

① 安否確認

週末、私は本校から約60km離れた自宅に帰っており、被災状況については教頭からの報告により把握することができた。校舎回りはすっかり水に浸かり校舎内に入ることは不可能で、地域一帯の停電が発生し交通も麻痺し始めている、ということだった。

そこで、長野市教育委員会(以下、市教委)の指示を受け、学区内の小学校に本部を置いて対応することとなった。まず行ったことは、生徒及び職員の安否確認である。職員29名については比較的容易に確認することができた。生徒については、学級担任に連絡し学級連絡網を用いて学級生徒全員の安否を確認するよう指示したが、なかなか進まなかった。手元には生徒名簿もなく、効率も悪く不確かな状況だった。結局、夕方時点で19名の生徒の確認ができていなかった。

翌10月14日は体育の日で休日だったが、職員を招集し、全職員で再度保護者へ連絡を入れた。漸く全生徒の安否確認ができたのは10時のことである。まずは、全生徒の無事を確認できたことに胸をなでおろすと共に、被災当日に安否確認ができなかったことが、苦い事実として胸に残った。当日の安否確認が難しかった原因は、以下の通りである。

- 本校セキュリティーポリシーに従い、生徒の個人情報は学校内にあり、保護者の携帯電話番号がわからなかった。
- 学級連絡網は学級担任が持っていたが、学区内は停電状態で自宅の電話が不通だった。
- PTAメールの機能(携帯電話など学校外からの配信、アンケート機能等)を活用できなかった。
- 保護者、学校間における双方向の連絡系統が構築されていなかった。

本校では、インフルエンザ対応など、時折、PTAメールを活用してきたが、学校側からの一方向の連絡で、いざという時の効果的な利用につながらなかった。各学級担任は何度も各家庭へ電話をかけ状況把握に努めたが、被災家庭より「こんな時に、何度も連絡してこないで…」との声もあり、対応に苦慮する場面もあったとのことである。効率的でより簡単な方法を予め構築しておくことで、職員を疲弊させずより迅速に初期対応することができただろう。以下、今後に生かしていきたい対応方法である。

- PTAメール100%登録を進める。
- 未登録者の把握と全校生徒名簿（紙ベース）の所持（校長・教頭）
- 年度当初における緊急時の連絡方法の確認
- 日頃からのPTAメールの活用（保護者アンケート等、双方向の連絡手段として活用）

② 生徒宅や通学路の安全確認

被災当初から、私たちが最も心を砕いてきたことは「生徒の安全」である。

被災2日目に全生徒宅への電話連絡を行い、安否確認をすることはできた。しかし、生徒に直に会って話を聞き、様子を伺うことはできていない。また、生徒宅や通学路の状況確認についても同様である。

そこで、教務会を開き、翌日以降の職員の動向について確認することとした。被災3日目の夕刻のことである。学級担任には被災の有無に関わらず、全生徒の家庭訪問を行うように指示した。その際、地域が被災し安全な状況かどうか確認できていなかったため、職員自身の安全にも注意しながら、生徒が通学路を歩行する際、安全が保障できるかどうかを見てきてほしいと話した。自分の目で見、足で歩いて確認することが重要だと考えたからである。

本校を支える太い柱のような存在である教務会のメンバーたち。その頼りになる職員たちに自分の考えを伝え、意見を聞くことはとても大切なことと考えている。私の意見を聞いて、職員たちはどのように答えてくれるだろうかと、職員との対話は被災に関わらず、常に心がけるようにしている。

ある職員からは「電話連絡で安否確認ができたので、次は校舎の復旧を行ったほうが良いのではないか」との意見が出された「その方がより早く生徒を学校に受け入れることになるだろう」とのことだっ

た。また、「学区内の道路は、安全面や衛生面など難しい場面もあり、全生徒の家庭訪問には時間がかかる」という意見もあった。話し合いは、なかなか結論が出ず、時間が過ぎていった。職員たちの心配はもっともなことだと思いつつ、生徒や保護者、家庭の状況を確認してほしいと、改めて翌日からの家庭訪問を指示することにした。校舎の復旧作業はボランティアの皆さんの力をお借りすれば進めることができる。しかし、生徒の状況判断や心のケアは、日頃から関係を紡いできた本校職員にしかできない。

時計の針は夕方5時を回ろうとしていた。10月末の校内はすでに暗闇に包まれていた。停電で灯りが点かない中で、庁務員が用意してくれたランタンの灯りを見つめながら、私は自分が今まで大事にしてきたこと、そして、この被災時でも大事にしていきたいことを職員たちへ訴えた。最終的には職員が納得してくれ、全生徒の家庭訪問をすることとなり、翌日以降の動向を定めることができた。安堵と感謝の思いが沸き上がってきた瞬間だった。

翌日からの家庭訪問の結果、被災生徒宅の状況や通学路の衛生面など心配な状況にあることが報告された。職員からの報告を受け、最終的に校長、教頭で地域を巡視して回った。千曲川決壊近くの地区は、路肩に土砂が寄せられ道幅が狭くなっていた。土砂が乾くと砂ぼこりが発生し、前が見えなくなるほどの状況であった。私は、学級担任と同様、自分の目で見、足で歩いて判断することの大切さを再確認した。その後、危険個所を回避した安全な通学路への変更や生徒の通学方法の決定に至ることができた。

(2) 学習の保障

① 学習の場の模索

年度後半に入った時期での被災。校舎の復旧も心配だったが、生徒の学習をどのように保障していくのかと被災当初からずっと気がかりであった。特に、受験生である3年生にとっては、自宅や学校が浸水したことは別の不安が膨らんでいるだろうと、この状況を一日も早く打開したいと願うばかりだった。

本校での学校再開が最も望ましかったが、水道は復旧したものの電気も通らず、1階部分の施設はすべて使えない。キュービクルの修理には、まだまだ時間がかかるとのことだった。そんな状況から、本校での授業を再開することは当面難しいという結論

に至った。そこで、以下の方針で生徒の学習保障を進めることとなった。

- 他校の教室をお借りして、授業を再開する。
- 3学年の5教科授業の再開を最優先する。
- 校舎復旧は、自衛隊、ボランティア等の力をお借りし、4学年職員が中心となって授業と並行して進める。

当初は、学区内の小学校をお借りすることを考えた。しかし、小学校の児童用机、いすは中学生の体にとって低く、小さい。中学生用のそれらを新たに用意するのは、費用も労力もかかってしまう。また、教材等も中学校用のものはない。それならば、どちらかの中学校へ教室の貸し出しを依頼するしかないと考え、市教委と確認をしながら検討を進め、長野市の基幹校である長野市立長野中学校（以下、長野中）に受け入れていただくことが決まった。3教室をお借りし3学年の授業が再開されることとなった。全学級分の教室確保は難しかったため1、2学年は本校で自主学习という形から再開することとなった。

再開の日は、被災から16日目、10月29日（火）となった。

② 通学方法

市立長野中までは約7kmの道のりである。移動手段は、市教委より手配していただいたバスである。生徒は自宅近くからバスに乗車し長野中まで移動することとなった。とはいえ、正式な公共交通機関のバスルートではなく、乗降時の状況が心配される。そこで、3学年職員がバスに乗車し、生徒と共に移動し、生徒の安全を確認することとした。勤務時間前からの業務となるが、勤務時間の調整を行うことで対応し、職員の負担にも配慮しながら、生徒の安全保障を実践するようになった。

衛生面については、移動中は全員マスクを着用、長野中に到着時には、消毒液を浸した雑巾の上を歩き、靴裏をしっかりと消毒してから校内に入ることとした。本校生徒を受け入れていただくことによって、長野中生徒の衛生面が侵されることがないように、長野中側と打ち合わせを重ね、両校保護者にも家庭通知にて周知し、ご理解いただくように配慮した。

③ 時間割

10月29日（火）から11月8日（金）に渡って、本校と長野中の2か所で学校生活を送ったが、その

間は学年ごとに別の動きとなったため、各学年の時間割を組んで、主に学年職員が学年生徒の指導に当たることになった。ただし、3学年については、他学年職員も教科担任であるため、3学年の授業を最優先するというルールで各学年の時間割を計画した。以下、学年ごとの時間割の概要である。

<1, 2学年>

1週目は自主学习としたが、どの教科のどんな学習をしたらよいかという生徒の不安を解消するために各教科会から「自学のやり方」というプリントを配布し、学習内容や方法を指導した。

2週目からは、「1, 2学年も早く授業を再開していきたい」という声もあり、計画を更に練り直すこととなった。3学年授業のために長野中まで移動する職員もいることから、残った職員で総合的な学習の時間を進めようと、1学年が11月8日（金）に学区内の豊野西小1, 2学年の児童と交流学習をすることになった。豊野西小は体育館が避難所となっており、児童が体育館も校庭も使用することができない状況であったため、自由に遊ぶことができない児童たちと一緒に交流しながら楽しいひとときを過ごしたいという思いで計画され実現した交流会だった。

中学生は、小学生との関わり方を考え、相手に合わせて工夫したり安全に配慮したりしながら活



動することができた。小学生と一緒に焼き芋必要感のある、まさに生きた学習である。工夫次第でこんな充実した活動ができることを実感するひとときとなった。

<3学年>

3学年は、バスで移動するため普段よりも登校に時間がかかること、久しぶりの学校生活であること、被災している生徒への配慮等もあり、長野中の日課に合わせ、2, 3, 4校時の5教科の授業と給食、朝と帰りの会の内容とした。

2週目には「体育の授業もしたい」との生徒からの要望もあり、両校体育科職員が急きょ打ち合わせをし、バスケットボール、卓球など4種目から生徒が選択し長野中3年生との合同授業が実現できた。

長野中最終日には「お別れ会」が企画され、両校生徒によるエールの交換を行い、これからも頑張る

うと誓いあうことができた。被災以来、暗いニュースが多く生徒たちの心身の状況を心配してきたが、このようにエネルギーがある生徒たちの逞しさに、大人も頑張らなければと勇気をもった次第である。

合同授業やお別れ会などの様子から、長野中で
の学校生活は、単なる学
習保障だけでなく、生徒
の心に残る貴重なも
のになったと思う。



お別れ会でのエール交換

(3) 心のケア

① 学校生活における生徒の姿から

11月11日(月)より3学年生徒も戻り、全校生徒での学校生活が再開され、大変嬉しく感じられた。しかし、間もなく、今までとは違うどこか落ち着かない生徒の姿を心配する声が届いた。

学校は仮設校舎工事が進んでおり、外部からの来校者も多く慌ただしかった。学校の復旧を進めながらも、一番基本的で重要なことを全職員で注意して
いこうと再確認した。確認事項は以下の通りである。

- 生徒の様子をしっかり見守ること
- 授業を大切にすること。
- 授業や休み時間に、教室等で生徒と一緒に過ごすことを改めて大切にすること
- 生徒と一緒に給食準備や清掃をすること

どれも当たり前なことばかりである。しかし、混乱の中でどこか手薄になってしまったことを生徒の姿を通して感じ取り、全職員で警鐘を鳴らしながら学校生活を進めていくことになった。

② 被災生徒への対応

被災生徒のうち約半数が学区外から通ってきている。転校も検討しながらも本校に通うことを望み、決定した生徒、保護者たちである。被災前よりも通学時間も増え、それだけでも生徒の負担が大きい。

被災当初から、被災生徒への配慮を続けてきているが、不安や心配を外に出さず心の中に抱えている生徒も多く、表面上は落ち着いているように見えてしまう。そんな生徒の内面を少しでも感じ取るために、私たちは心のケアに関する研修会に参加したり、職員間の連絡を密にして注意し合ったりしている。また、被災した生徒全員が定期的にSCと話をする機会を設けることも進めた。一見落ち着いた学校生

活を送っている様子でも、その内面にはさざ波が立っていることを常に認識していかなければならない。SC等につなげる前の気づきは、生徒と共に日常生活を送る私たちの重要な役割である。

4. まとめ

今回の被災で体験したことは、非日常のことばかりであった。しかし、東日本大震災時の大川小の判例にもあるように、学校の危機管理に対して校長は地域住民よりもはるかに高いレベルの防災知識や経験が求められる。今回の経験を振り返り反省点を洗い出し、危機管理をより確実なものにしていく責務を感じている。

令和元年度末から2年度当初にかけては、新型コロナウイルスへの対応で新たな危機管理を迫られたが、台風被災時の経験を活かして、学校と家庭間で双方向の連絡をPTAメールで毎日取り合い、健康観察や休業中の相談にも応えることができた。台風被災時より長い休業期間だったが、家庭の様子を把握でき、きめ細やかな支援をすることにつながった。

また、学習保障についても、台風被災時の自学では漢字練習やドリルなど復習的な課題を中心に与えたが、コロナ禍では生徒がより学びの主体者となるよう各教科会で課題を再検討し、教科書を使った予習的な内容も取り入れながら、学びの質を高めることを目指した。今後は健康観察等だけでなく、学習にもICTを取り入れることが更に求められるだろう。そのための技能を生徒も教員も身につけるための研修を重ねている。

一方、生徒の心のケアは今までの学校生活において大切にしてきたことと大きく変わらないとも感じている。指導の基本として実践してきたことをより意識的に全職員で継続していくことが重要と考える。

今回の本校の取組は、近藤守長野市教育長をはじめとする市教委や長野県教育委員会のご指導ご支援の下、進めることができた。また、ボランティアとして復旧作業に参加してくださった皆様、全国及び県下各地から義援金やメッセージで応援してくださった皆様等、多くの方々からのご支援によって勇気と元気をいただいていた一歩一歩進むことができた。そして、先の見通しが立たず大変苦しい状況だった時に笑顔を忘れず前を向いて共に進んでくれた本校の職員たち。すべての皆様のお陰で今日を迎えることができた。

感謝の思いをこれからの学校づくりと生徒への支援に活かしていくことが学校の復興へ向けての第一歩で

あると改めて胸に刻み、学校経営に邁進していきたい。